

報告・上映作品



酒井朋子「紛争経験を聞くということ」

限られた数の一般個人への聞き取りから、戦争や紛争の経験について何を言うことができるのだろうか。「語りの声」へ着目することから見えてくること、逆に見えにくくなることを、報告者の北アイルランドでの聞き取り経験にもとづき、映像記録・作品との比較もまじえつつ考えていく。

田沼幸子『Cuba Sentimental』(クーバ・センチメンタル) (60分)

サチ(作者)がかつて知り合ったキューバ人の若者達は、その後みな、望んでいたとおり外国へと去った。それは「乗って来た船を燃やすようなもの」である。キューバ人は出国後11ヶ月が経つと祖国での居住権を失うのだ。それでも彼らを国外へと駆り立てたものはなにか。そして、家族や友人たちと離ればなれになった彼らが思うことは？

市岡康子『ジェイ・ヘム・リュウカンボジアの神がかりー』(50分)

ボル・ポト体制瓦解後初の総選挙が行われた1993年、弾圧され失われたはずの土着の精霊ネアクタへの信仰の場に遭遇した。そのとき出会った霊ルップを13年後に再訪し、前回、記録した儀礼の映像をフィードバックしつつ、神がかりになった経緯や一切の宗教を禁じた体制下でいかにして生き残ったのかを問うなかで本作が生まれた。

酒井朋子 Tomoko Sakai

大阪大学GCOE 特任助教。専門はライフ・ストーリー研究、戦争・紛争の記憶。近年の業績に“Narrating Troubled Lives in Northern Ireland” (PhD thesis, Bristol University, 2009)、“Trans-generational Memory: Narratives of World Wars in Post-Conflict Northern Ireland” (Sociological Research Online, 14:5, 2009)がある。

田沼幸子 Sachiko Tanuma

大阪大学GCOE特任研究員。専攻は文化人類学。共編著に『ポスト・ユートピアの人類学』(2008年、人文書院)、論文に『「あいだ」の言葉を聞くー人類学者と映像の可能性』(2010年、『コンフリクトの人文科学』第2号)、「同志たちの愛のあとー創設フィクションとしてのキューバ革命」(2010年、『リブレイザII期第1号』)がある。本シンポジウムで上映するのは初の映像作品である。

市岡康子 Yasuko Ichioka

元立命館アジア太平洋大学教授、元日本映像記録センター、プロデューサー。東京都立大学文学部卒業。1962年に日本テレビに入社し、「ノンフィクション劇場」「すばらしい世界旅行」などのドキュメンタリー番組の制作を担当。1972年、日本映像記録センターの設立に参加、引き続き「すばらしい世界旅行」の制作にあたり、アジア太平洋を専門のフィールドに、この地域の人びとの生活や文化を克明に記録した。2001年から6年間、立命館アジア太平洋大学で農村のフィールドワークに基づく映像制作のゼミを指導。

司会

古川岳志 (大阪大学 GCOE 特任助教)

コメンテーター

中川理 (大阪大学 GLOCOL 特任准教授)

小田昌教 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所特任研究員)

村尾静二 (総合研究大学院大学助教)

ディスカッサント

富山一郎 (大阪大学文学部准教授)

久保田美生 (大阪大学 GCOE 特任助教)

お問合せ先

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-2
大阪大学大学院人間科学研究科内 グローバル COE 事務局
TEL : 06-6879-4046 FAX : 06-6879-4049

主催

大阪大学グローバル COE プログラム
「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」

コンフリクトを みる・きく ——方法論再考

大阪大学グローバルCOEプログラム
「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」
シンポジウム

文責・田沼幸子

私にとって唯一の撮影方法は、カメラを
もって歩き回り、最も効果的な場所に特
にいて、写されている人と同じような
生きどしたカメラの動きを即座につく
る(…語)もはや自分自身では
なく、「エントラント」な耳」をもった
「機械的な目」となる。フィルム制作者の
「奇妙な変化の状態を、私は、魅いら
れ」のような現象から類推して、「ソ
とをいける。

映像人類学は科学なのかアートなのか、撮
影は三脚を用いるべきか、手持ちに敏ず
べきか等、方法論に関する同じ問いが繰
返されてきた。しかし、映像作成する側
もしない側も、そもそも人類学的報告に
いて映像を用いるのはなぜか、という根
本的な問いは避けて通らなければならない。
実のところ、ルービエの言葉がよ
うに、さまざまな正当化の「理由」よりも
「信」という堅い何かによって支えられ
ているのだ。だとしたら、人類学的映像に
ついて語るべき、必要な言葉がフ
ジナルか、といった表象媒体に関する議
論ではなく、それが撮られた／作成された
状況と、その場にいる人々の関係性な
ではないか。しかも、その関係性な
が不可欠なアクターとして関わっている
ということをいまいちど考察に組み入れる
べきだろう。再びルービエの挑発的な言葉を
引用し、当日の議論にこなけたい。

なぜ、だからのために、われわれは人々の問
にカメラをもちこむのであろうか。不思議
なことには、この質問に対する私の答えは
常に同じである——「私のためです」(…絶
えちるん、科学的理由(急速に変化しつ
ある文化や、消滅してしまうおそれのある
文化の、視覚資料館を「こと」や、
政治的理由(答えがたい状況に対する反証
に加わる)や、美学的理由(記録しなけれ
は消えてしまう美しい景色、顔、身振りな
どの発見)により、その使用を正当化する
ことは常に可能である。しかし、実際に
はわれわれは、突然、フィルムを撮る必要
が生じたり、あるいは、まったく同じよ
な状況で、撮影してはならないという確信
があるから、フィルムを制作しているの
である。

報告書プロフィール